

学校だより

プラタナス



令和2年7月6日(月)

No.15 市川市立市川小学校
校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/ichikawa-sho>



凡事徹底！まずは自分の足元、そして靴箱から

小学生のころ、父の革靴を磨いてお小遣いをもらったり、「きれいになったよ、ありがとう」と褒めてもらったりするのが嬉しかった記憶があります。今でも靴が汚れていると気分がよくありません。

朝晩の通勤でも他人の足元に自然と目が行ってしまいます。きれいに磨かれている人がいれば、「目立たないところまできちんとしている人だな」と考えます。逆に、スーツはきちんとしていても、靴が汚れていたり擦れていたりすると残念に思えてしまいます。ビジネスシーンでは、相手と向き合い相手を知りたいときには「その人の靴を見なさい」と言われることもあるそうです。

さて、慣用句に「足元(足下・足許)を見る」という言葉があります。「他者の弱い部分を見つけては、その弱みに付け込むこと」と辞書にはあります。語源を調べてみると、昔の街道や宿泊場で、馬方や駕籠(かご)かきといった職業の人たちが、歩き疲れた旅人の足(履物)の具合を見て、高額な駕籠代を要求していたことから発しているようです。「疲れているのだから、このくらいの金額を提示しても断れないだろう」と弱み(疲れ)に付け込んで「駕籠に乗ったほうが楽ですよ」と接客していたわけです。

あるお寺の住職の次のような言葉があります。

はきものをそろえると 心もそろう 心がそろうと はきものがそろう
ぬぐとときにそろえておくと はくとときに心がみだれない
だれかがみだしておいたら だまってそろえておいてあげよう
そうすればきっと 世の中の人の心もそろうでしょう

そのお寺では、禅の修行の中に「履物を揃える」という行為を組み込んでいたと言われます。履物を揃えることは「自分自身を見つめる」「自分の行いを振り返る」ということにつながると考えられていたからです。つまり、履物が散らかっていると心が乱れており、揃っていれば心が落ち着いているということです。

学校に子供たちが登校するようになって、ひと月以上経ちました。ふと昇降口の靴箱に目をやると、雨の日でも6年生の靴はかかどが揃っていて気持ちがよくなります。凡事徹底！当たり前のことをバカにせず一生懸命行える、細部まで気を配れる、そういう子供たちに育ててほしいと願います。まずは「そろった靴箱」を合言葉に、全校で取り組みたいと思います。そう言う私の上履きは薄汚れて穴があいてきました。足元を見られないように…?!



『肌色』ってどんな色？

六月十九日に、約3か月遅れてプロ野球が無観客で開幕しました。それと時期を同じにして、楽天イーグルスに所属するオコエ選手の昔の「辛い差別体験」が新聞に掲載されていました。

オコエ選手は東京都出身で、ナイジェリア人の父を持ちます。小さいころ、親の似顔絵を描く際に、先生が「肌色で塗りましょう」と言ったとき、涙ながらに茶色のクレヨンで親の顔を描いたというエピソードが一例として紹介されていました。肌の色の違いで、差別や心無い言葉をたくさん受けていたといいます。私たちは無意識で「肌色」という言葉を使います。そして、その裏には「肌色とはこんな色！」という先入観をもって話をしてしまいます。そこに辛い思いをする人がいることに気づかずに。

肌の色だけではありません。髪型やメガネ、言葉、服装、歯並びなど、人とちょっと違うことを取り上げて差別的な言動をとる場面もあります。時にはジェンダーに関わる部分で、無意識のうちに傷つけてしまっていることだってあるかもしれません。

本人の努力や意思では変えられないことに対して差別や偏見の目を向けてしまうことがないよう、大人も子供も意識改革が必要なのかもしれません。たとえ、悪気はなかったとしても。



7月21日と8月2日は、夏の土用の丑の日

土用の丑の日が近づくと、スーパーには「うなぎ」の文字がたくさん見られるようになります。

では、どうして土用の丑の日にウナギを食べるようになったのでしょうか。ウナギを食べるようになった由来は諸説あるようですが、最も有力だとされているのが、江戸時代の科学者であり物

知りでも有名だった平賀源内が広めたという説です。本来、ウナギの旬は冬であって、わざわざ夏に食べるものではなかったのだそうです。当然、江戸時代にも夏場は客足が遠のいて、ウナギ屋を営む人は困り果てていたといえます。そこで、ウナギの売り上げを夏にも伸ばせないかと平賀源内に相談したところ、店先に「本日、土用の丑の日」という張り紙を出すよう助言されたそうです。その結果、博学の先生が言うのだからと評判を呼び、ウナギが飛ぶように売れて大繁盛しました。これを見たほかの店も真似しない手はありません。現在のように、夏の土用の丑の日にウナギを食べるという文化は、そのころから続いているのです。

また、「丑の日に『う』の付くものを食べると夏負けしない」という風習があったとされ、ウナギ以外にも梅干し、瓜などを食べる習慣が根付いていました。さらに、丑の方角の守護神が「玄武」という黒い神様だったため、「黒い物を食べるとよい」というおまじないも考えられました。つまり、「う」が付いて「黒い」食べ物となると、まさにウナギがドンピシャだったようです。

このウナギの蒲焼ですが、関東ではうなぎを背開きにしますが、関西では腹開きです。関東では、腹開きだと「切腹」をイメージさせて縁起が悪いと嫌い、商人文化の関西では「腹を割って話せるように」と腹開きにしたとされます。

さて、私たちが食べるウナギのほとんどは養殖で、しかもほぼオスであるということはあまり知られていないようです。現在、日本全国のウナギ流通量で天然ウナギが占める割合は僅か0.3%未満。そして、ウナギが幼魚のうち全部オスで、水質や餌など過ごした環境によって転換してメスになるのだそうですから、なんとも不思議です。天然のうなぎでも川にいるものはオスが多く、海にいるものはメスが多いそうですよ。HP で書いた「半夏生」など、おもしろい風習が日本にはたくさんあります。



毎年市川市の北部・南部に分かれて実施してきた、特別支援学級児童・生徒による「合同学習発表会」は、現在の状況から考えて実施困難と判断し、今年度は中止となりました。たくさんの方に会場へ足を運んでいただき、ひまわり学級の児童をはじめ、楽しみにされていた方が多くいらっしゃることを思うととても残念です。